

# 落ちた心臓の名門

## 「特定病院」取り消し決定

### 厚労省 分科会

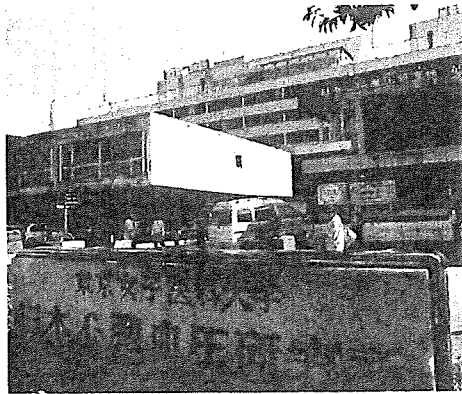
東京女子医科大病院が心臓手術ミスで小学6年の女児(当時12)を死亡させ、医師2人が逮捕された事件で、厚生労働省の医療分科会は12日、同病院への特定機能病院の承認を取り消す意見をまとめた。病院側が申し入れていた承認の「一掃」を認め、行政処分として取り消すことになった。特定機能病院承認取り消しは初めて。

取り消しを提言された厚労省は、病院側から意見を聴取したうえで、後日改めて医療分科会に承認取り消しを諮問。同分科会の答申を受けて正式に決まる。

分科会は、①院内の安全管理委員会に事故が報告されていなかった②遺族への説明がなかった③事実が隠蔽されたこと、3点を挙げて「あるまじき事実」と結論づけた。大学側が承認を辞退する中申し出ていたが、刑事事件になってから言い出された、などの理由で、認めないことにした。

## 東京女子医大

# 「心の医療」に乗り遅れ 縦割り、院内の連携も欠く



「心研」。戦後、長く心臓治療の「名門」だった東京女子医科大病院の日本心臓血圧研究所が、揺れている。圧倒的な心臓手術数を誇り、国内の心臓病研究の牽引車だった心研が、なぜ、初歩的な手術ミスを起こし、隠蔽工作を図ったのか。「特定機能病院」の承認を12日、取り消す方針の

厚生労働省の医療分科会が問題にしたのは、心研の体質そのものだった。外科権威の下輝かしい伝統

心研は56年、「心臓外科の父」と呼ばれた榊原任同大教授によって設立された。また心臓手術で、2人に1人が亡くなると言われた時代。若い医師を、榊原氏は「研究を重ね、日本の心臓医学のレベルをあげてはし

い」と励ました。当時を知る医師は「研究所全体が熱気に満ちていた」と振り返る。60年代、人工心肺装置の導入などで飛躍的に治療実績を上げ、指導的役割を確立していく。心研が手がけた心臓手術は2万件を超える。若い優秀な医師が集まった。

一方、技術が優先され、患者への説明がないまま「実験的」ともいわれる手術を施した例もあったと、当時在籍した医師は振り返る。 内部の二分化 隠蔽体質生む 榊原氏は79年に世界。 間もなく心臓治療の分野は、成人を治療する「循環器」と、先天性の疾患をみる「循環器小児」に分かれ、それぞれに教授が置かれた。心研で学んだ医師の多くが「このころから、変わった」と証言する。かつて勤務した教授は「循環器と小児でお互いに足を引っ張り合っていた。次第に不都合なことは隠すようになった」。 90年代初期、心臓手術でミスを犯した病院が訴えられたことがある。上司が部下に診療記録などを書き換えるよう指示した。当時助手で、証拠隠滅容疑で逮捕された瀬尾和宏医師(46)は、その改ざんの光景を間近で見ていた。隠蔽体質は引き継がれていた。

チーム医療の大切さが叫ばれ始めていた。だが、心研では他科の医師や看護師、医療機器を扱う技士の連携はなかなか生まれなかった。昨年3月、群馬県高崎市の小学6年生の女児が手術ミスで亡くなった事故を調査した病院の報告書には、「小児外科は人工心肺を担当する臨床工学技士の操作を信せず、任せよう」となっていたとある。 患者の家族と意思疎通なく その女児の父親には忘れられない光景がある。 瀬尾医師の言葉だ。 手術前の説明で、瀬尾医師に言われた。 「心臓の中には何が入っているのか？」 「私たちが質問ですか」と聞き返すと、「私だつて疲れている。不満があるなら自分でやればいいでしょう」といって突然、ボールペンを机の上に投げつけた。 厚労省の医療分科会には、ほかに、心研で手術を受けて死亡するなどした3人の子どもの家族が、医師のこういふ説明や治療に疑問を持ち、真相究明を申し入れた。 委員からは「家族と意思疎通ができていない。心研の体質が問われる」という意見が相次いだ。 参院厚生労働委員会に

女子医大小児心臓手術事故 特定機能病院取り消し決定

2002年7月12日 朝日新聞夕刊

11日、呼ばれた東京女子医大の林直樹院長は、質問にこう答えた。 「技術優先で医療の進歩が主体だった。世の中が変わり、心を大切にしない」と医療が成り立たない時代に、小児心臓外科の意識は極めて時代遅れだったと考えている。